

42) Swinton, N. W. & Wise, R. E.: Significance of Epilation as an Adjunct in the Treatment of Pilonidal Sinus Disease. *Am. J. Surg.*, **90**, 775, 1955.

43) Theis, F. V. & Rusher, M. W.: Pilonidal Sinus: Sacrococcygeal Cyst Teratoma. *Surg. Gynec. & Obst.*, **79**, 482, 1944.

44) Turell, R. & Glastone, A. A.: Pilonidal (Sa-

crococcygeal) Sinus and Cyst. *Internat. Abstr. Surg.*, **93**, 417, 1951.

45) Tylicki, M.: The Pilonidal Disease. *Polski Przegl. Chir.*, **2**, 137, 1954.

46) Weale, F. E.: The Hair of the Pilonidal Sinus. *Lancet*, **1**, 230, 1955.

47) Wenger, D. S.: Pilonidal Cysts: Their Origin and Treatment. *Am. J. Surg.*, **80**, 242, 1950.

右大腿より発見されたマンソン条虫症の1例

京都大医学部外科学教室第2講座 (指導: 青柳安誠教授)

阿 部 弘 毅

(原稿受付 昭和34年5月21日)

A CASE OF LIGULA MANSONI FOUND IN THE RIGHT THIGH

by

KOKI ABE

From the 2nd Surgical Division, Kyoto University Medical School
(Director: Prof. Dr. YASUMASA AOYAGI)

A 29-year-old female was admitted to our hospital with a chief complaint of a painless tumor in the subcutaneous tissue of the right thigh, and the operative findings revealed this tumor was a cystic capsule containing a white string of Ligula Mansoni.

The patient was so superstitious that she believed the raw flesh of the treefrog was to do good for the heartberiberi from which she had been suffering during the past 6 years, and she actually ate 5 to 6 of the frogs in the raw.

More or less 160 cases of Ligula Mansoni had been reported in Japan. From these cases it was found that parasitism of the plerocercoid on the human being usually follows the ingestion of inadequately cooked flesh or unboiled water containing the plerocercoid. So far the invasion of this plerocercoid through the skin is not yet known. In this case the route of invasion seems to be comparatively easy to follow.

緒 言

私は最近雨蛙の生食により感染したと思われるマンソン条虫症の1例を経験したので、ここに報告する。

症 例

患者 京都市内在住の29才の女子

主訴: 右大腿に於ける無痛性腫瘍

現病歴: 入院の6年程前から心臓脚氣に悩み、民間療法として雨蛙の生食が効果があると聞き自分の庭先の雨蛙をそのまゝ5~6匹食べたことがある。それ以外に鳥肉、獣肉、淡水魚を生食したことはない。約2年程前誘因と思われるものがなく、右大腿内側で膝関節に近く約拇指頭大の腫瘍があるのに気付いた。無症

状のために放置したところ、約1年程前に腫瘤表面の皮膚に多少の癢痒感を来し、それよりも10cm程鼠径側の皮膚が多少発赤して新たに腫瘤を生じ軽度の圧痛を訴える様になつた。2~3ヵ月前になると腫瘤は同様に大腿内側に8cm程移動して約鳩卵大となつた。本院外来で腫瘤の穿刺を行つたところ透明な液を2cc程得たので、リンパ腫か或いは寄生虫の疑いが置かれた。

入院時所見：患者の全身所見に異常なく、血液所見では赤血球数423万、白血球数8,200、好酸球3%で、好酸球増加はなく、糞便中にも虫卵は証明されなかつた。局所所見としては、右大腿前面上内側に鳩卵大、ほぼ卵円形の腫瘤があり、その境界は不鮮明、表面皮膚に異常を認めない。触診すると腫瘤は弾性軟で、圧縮性、透光性はなく、指の間に挟んでも握雪感はない。下部組織、表面皮膚からは良く移動するが軽度の圧痛が認められる。この腫瘤よりも約4cm外側に同様の性質の小指頭大の腫瘤を触れ、表面皮膚に軽度の赤色着色と穿刺による針孔がみられる。右鼠径部に2~3個のクルミの実大のリンパ節腫脹があるが、患者の知覚・運動障害、腱反射の異常等は認めない。

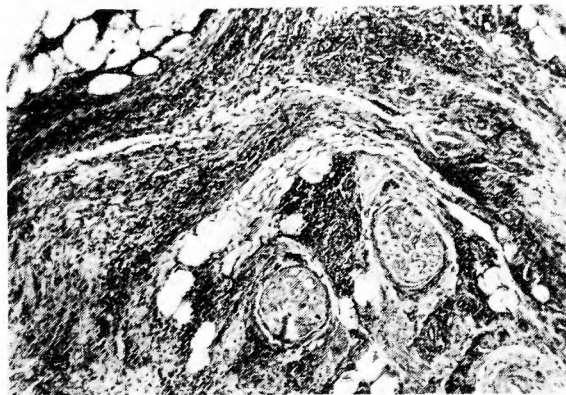
手術：腰椎麻酔下に右大腿で穿刺を行つた腫瘤上に約8cmの縦皮切を加え皮下脂肪組織の剝離を進めると結合織性に増殖した癒着性組織のみで明らかな膿瘍は認められないので主腫瘤に向かい更に正中側に剝離を進めると、腫瘤の境界は同様に不明であつたが結合織性の被膜様のものに達した。これを破ると少量の透明な液が流出し、乳白色の柔軟な帯状物が折れ曲り塊状をなしているのがみられた。そこでその先端を摂子でとり出すと蠕動を行う虫体であつた。更に虫体を求めて剝離を進めたが、虫囊と思われる米粒大の正円形の腔隙を5~6個認めるのみであつたので、これを剔出して、膿瘍形成のないことを確かめ手術を終つた。

剔出虫体：虫体は白色扁平紐状を呈し、虫体の周囲には輪状に無数の横皺壁を有しているが体節の形成なく、体縁は鋸歯状を呈している。頭部は米粒大扁円形で前端の中央に截痕が有り、尾部は扁平に拡がり扇の様な形をし、マンソン条虫の特徴を示していた。虫体の長さは28cm、横径0.9cm、厚さは0.3cmである。本学病理学教室に鑑定を依頼したところ、これらの所見からマンソン条虫の幼虫型 Plerocercoid と思われるとの診断を得た。虫体周囲組織の組織学的所見では、明らかな虫囊と思われるものは見当たらないが、虫体の存在

した被囊及びその附近の結合織には多数の好酸球、類上皮細胞、組織球、異物巨細胞等の浸潤を伴つた寄生虫性慢性肉芽性炎症像が認められた。

考 按

マンソン条虫の第2中間宿主体内の幼虫型即ち Plerocercoid の人体寄生の報告は東洋ことに日本、中国、朝鮮等に多いが、近年豪州、アフリカ、アメリカにも多少の報告例があるようである。我が国では1882年 Scheube が京都の四人の尿道より発見して以来現在まで150例ほどの報告がある。その半数近くが京阪地方に分布しているが、その他の各県にも僅かずつ散見する。本幼虫の寄生は9~60才にわたつて広く分布し、特に20才から50才迄の男子に多く女子には稀である。我が国の分布地域をみると京阪地方が72例、東京都が6例、愛知、三重の3例づつなどが多い地方として報告されている。1個体にみられる本幼虫の寄生数は通常1条で Manson の報告した中国人屍の12条が最も多い症例である。寄生部位は脂肪組織に富むところ、又は皮下で大腿部、腹壁、下腹部、鼠径部、胸壁等に多く膀胱、尿道、精索、結膜下等に寄生した例もある。本症例の如く大腿部皮下のみを移動したものや、下腹部から大腿部へ、又大腿部から陰囊へと移動した報告例も見受ける。前述のように京阪地方に症例の多いのは実際に症例が多いのか、又は他の地方では発見されずにいるのかはつきりしない。大多数は無痛性腫瘤を生ずるが、2次感染により膿瘍を形成する場合もある。本幼虫裂頭条虫の終宿主は主として犬及び猫ライオン、虎、狸、狐、メケテ等猫科の肉食獣に限られるようで小腸に寄生する。マンソン条虫は卵内で六鉤幼虫となり孵化したものは第1中間宿主であるケンミジンコの1種の Cyclops leukarti に入つて发育し20日後には感染能力を得て Proceroid となり、ケンミジンコを食う機会のある第2中間宿主、即ち人間を含む哺乳類、鳥類両棲類等の蛙、蛇、鶏、鴈、鴨、豚鼠などに摂取されて发育し Plerocercoid となる。これが終宿主に摂取されて始めて成虫になるが、それ以外の宿主に喰われると、消化管壁を穿通して前述の場所に Plerocercoid のまま長期にわたつて寄生する。人体への感染経路は2つ考えられ、1つは第1中間宿主たるケンミジンコを含む生水を飲むことであり、他の1つは第2中間宿主である蛙、鶏、鴨等を生肉で又は不十分な料理法によつて食する場合とである。経皮感染は今のところ承認されていない。第2中間宿主間



第2図 虫体の存在した周囲組織

では決して成虫にならず、いつまでもPlerocercoidで生存する。感染源となる人類以外の第2中間宿主、たとえば鶏、蛙、魚類まれに牛、豚についても諸家により種々の報告があるが、蛙えの寄生率にも地方により差があり岡村らは東京附近では3~4%, 沼津附近ではほとんど100%に達すると云っている。また鈴江教授に依つても熊本附近の食用蛙には殆んど例外なく本条虫が発見されるとの事である。本症例では雨蛙の生食の既往があり、その他の第2中間宿主の生食はないので、感染源となつたことはまず確実と思われる。他の殆んど症例では生水を飲用したとか、生肉を食す



第1図 剔出虫体 28×0.9×0.3(cm)

る嗜好が割合はつきりしていても感染源を明らかに断定できたものは少ないので、この点でも本症例は興味あると考えられる。

参考文献

- 1) 原田直彦：岐阜県に於けるマンソン孤虫症。寄生虫学雑誌，3，120，昭29.
- 2) 三島好雄：成人の腹直筋内に発見されたマンソン条虫。臨床外科，11，12，861，昭32.
- 3) 伊崎周介：Manson 孤虫皮下寄生の1例。米子医学雑誌，8，1，82，昭32.
- 4) 高橋剛男：マンソン裂頭条虫に関する研究。昭和医学会雑誌，16，6，528，昭32.